

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22531061

研究課題名(和文) 特別な教育的ニーズのある子どもの社会適応の類型モデルと支援パッケージの開発

研究課題名(英文) Development of a educational package for children with special educational needs - focusing on the type of social adaptation

研究代表者

名越 斉子 (NAGOSHI, Naoko)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：30436331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、社会適応スキルの支援を適切に行うために、理論・アセスメント・支援方法の3つで構成される支援パッケージを作成した。また、ASA旭出式社会適応スキル検査によって、社会適応の類型化を行い、各類型の特徴や支援パッケージを適用する際の支援指針を明らかにした。そして、支援パッケージを約2年間適用した事例の分析を通じて、支援パッケージや類型の有用性と課題を整理し、改良を加えた。適用事例の伸びや支援者への調査から支援パッケージや類型の有用性が確認されたが、未検討の類型の分析、知的障害児の少量かつ質的な伸びの評価の工夫、コンサルテーション要因の考慮などが課題として残った。

研究成果の概要(英文)：In order to support social adaptive skills appropriately, the educational package containing theory, evaluation, and the support method was developed. And social adaptation was typified by Asahide Social Adaptive Skill Test. The feature of each type and the hint for applying the package were clarified. The usefulness and the problem of the package were shown through analysis of the example of application for about two years. The usefulness of the package was checked by monitoring the growth of skill, and the investigation to the teacher and mother using a package. However, the devising how to evaluate slight growth and a qualitative change, the analysis of the social adaptation types which were not taken up, exclusion of the consultation factor, etc. remained as future issues.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：社会適応スキル アセスメント 支援 発達障害 知的障害 タイプ

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 特別な教育的ニーズのある子どもたちに関する問題

教育においては、特別支援教育の推進が大きな課題であり、小・中学校ならびに高等学校の新学習指導要領には、障害のある子どもたちの実態に即した支援を計画的・組織的かつ家庭や他機関と連携しながら進めるという趣旨の記載が盛り込まれた。平成 20 年度特別支援教育体制整備状況調査(文部科学省 2009)によれば、小中学校の校内支援体制は幼稚園や高校よりも整備され、個別の支援・指導計画の作成率も高いが、十分に機能しているとは言い難い状況であった。また、発達障害のある人たちは、高学歴であっても安定就労が難しく、ニートの問題との関連も指摘されており(社会経済生産性本部 2007、田澤 2008、望月 1997、全国 LD 親の会 2005 他)、学校卒業後の総合的な支援の充実が、労働・福祉・医療の緊急課題であった。

### (2) 社会生活への適応能力の評価と支援に関する問題

特別な教育的ニーズのある子どもたちは、適切な教育や支援を受けることで、社会生活に必要な力を身につけ、社会適応を向上させることが可能である。特別な教育的ニーズのある子どもたちの社会適応上の困難の背景的要因は様々でだが、検査への抵抗感や検査実施・解釈技術を有する検査者の不足などの事情から、多角的な情報収集が難しい実態であった。また、情報収集がされても総合的に解釈し、適切な支援計画を立てるには、十分な研修や経験が必要であり、新卒者や多忙を極める中堅以上の教員にとって容易なことではないと考えられた。学校現場では、有効な支援方法を導き出せる簡便かつ信頼のおけるアセスメントが求められていた。

### (3) 研究成果と着想に至った経緯

研究代表者を含むワーキンググループは、知的障害のない子どもや中・高校生段階の子どもにも適用でき、社会生活全般の適応の評価が可能な ASA 旭出式社会適応スキル検査(肥田野, 2012)を開発した。知的障害児への適用研究では、定型発達児からの識別が可能であることや、社会適応能力の発達を高等部段階まで追えることが示唆された(菊池他 2009)。自閉症スペクトラム児への適用研究では、社会適応の個人内差を把握し、弱いスキルに着目して社会性支援を行った結果、問題の軽減が認められた(服部他, 2009)。これらのことは、ASA 検査が、特別な教育的ニーズのある子どもへの社会適応を高めるための支援に活用できることを示唆していたが、どのような社会適応パターンの子どもの、どのような方法で支援を行えばよいかは明らかではなく、解明する必要があった。

## 2. 研究の目的

研究代表者らが作成した ASA 旭出式社会適応スキル検査(以下 ASA 検査)の結果に基づいて、特別な教育的ニーズのある子どもの社会適応の類型モデルを作成し、各類型の特徴や支援のポイントを明らかにする。

各類型の特徴に応じた社会適応支援プログラムを開発し、ASA 検査を用いた実態把握から目標や課題の設定、支援後の評価に基づく改善(PDCA サイクル)を促進する ASA 社会適応支援パッケージ(以下 ASA 支援パッケージ)を完成させる。

## 3. 研究の方法

### (1) 社会適応の類型化を含む ASA 支援パッケージ試案作成

#### 社会適応の類型化

ASA 検査標準化時に収集した特別な教育的ニーズのある子ども(約 60 名)の ASA 検査のスキルプロフィールパターンをもとに、分かりやすさと支援への生かしやすさを考慮し、4 類型程度を抽出することにした。

次に、ASA 支援パッケージを適用する特別支援学校ならびに相談機関の知的障害や発達障害の事例と学年や障害等をマッチングさせた対照事例を用いて、類型と臨床像を照らし合わせ、類型の妥当性や類型化の手続等について結論を得るとともに、各類型の特徴を整理し、各類型への ASA 支援パッケージの適用指針仮説を設けることにした。

#### ASA 支援パッケージの作成

先行研究を参考に、特別な教育的ニーズのある児者や保護者・学校支援経験の豊富な臨床心理士、聴覚言語士、教諭によって、支援のための理論、アセスメント、支援方法の 3 つから構成される ASA 支援パッケージ試案を作成した。

### (2) 事例への適用による ASA 支援パッケージの有用性と課題の整理

#### 事例への適用

平成 23~24 年度に、特別支援学校に在籍する生徒 12 名、および相談機関を利用する児童 3 名を対象に支援パッケージを適用し、2 年弱の追跡調査を行った。社会適応の類型は日常良好、社会良好、バランス良好の 3 タイプであった。なお、担任や保護者には、研究代表者や協力者がコンサルタントとなり、子どもへの支援が円滑に進むようにサポートした。平成 25 年度に支援パッケージを適用しなかった対照群との比較も含め、適用経過を詳細に分析し、ASA 支援パッケージ活用の有用性や課題、類型別支援指針仮説と実際の支援との合致度などを検討した。

#### ASA 支援パッケージ利用者への調査

平成 24 年度末に、ASA 支援パッケージ全体の有効性を見るため、ASA 支援パッケージを利用した特別支援学校の担任に、使い勝手

や研究協力体制についてのアンケート調査を行った。また、コンサルテーション過程における担任と保護者（相談機関の3事例）の支援行動や対象事例理解の変容を分析した。

ASA 支援パッケージの有用性と課題の整理




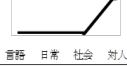

以上の結果を踏まえ、ASA 支援パッケージの有用性の検討、課題の整理を行い、ASA 支援パッケージ（理論や支援方法）や類型別支援指針の改良などを行うとともに、今後の継続研究の方向性やポイントを整理した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 社会適応の類型化

特別な教育的ニーズのある約 60 名の児童生徒のデータの分析から、ASA 旭出式社会適応スキル検査の4つのスキルの相当年齢の差異に着目し、4つのうちのいずれかのスキルの相当年齢が、他のスキルを3歳以上上回るという操作的手続きを用いて、「言語良好タイプ」、「日常良好タイプ」、「社会良好タイプ」、「対人良好タイプ」の4タイプ、いずれのスキルの間にも3歳以上の差異が認められない「バランス良好タイプ」の5タイプを設けた。

表1 ASAのスキル相当年齢に基づく類型

類型	4つのスキルの相当年齢プロフィール	操作的手続き
言語良好タイプ		言語スキルの相当年齢が、他の3つのスキルのいずれかを3歳以上上回っている
日常良好タイプ		日常生活スキルの相当年齢が、他の3つのスキルのいずれかを3歳以上上回っている
社会良好タイプ		社会生活スキルの相当年齢が、他の3つのスキルのいずれかを3歳以上上回っている
対人良好タイプ		対人関係スキルの相当年齢が、他の3つのスキルのいずれかを3歳以上上回っている
バランス良好タイプ		4つのスキルの相当年齢の差が、3歳未満である。

同じタイプに分類される事例には、共通した特性が見られることが分かった。そして、この類型手続きをより詳細な情報のある30名に適用した結果、各タイプの特徴はおおむね支持されることが確認され、そのことを踏まえた支援指針仮説を導き出すことができた（例 日常良好タイプ 表2）。

表2 日常良好タイプの特徴と支援指針仮説

子どもの特徴	・全体の37%。
	・90%が知的障害、IQレベルは中度が60%。
	・自閉症スペクトラムあり55%。
	・年齢は高校段階が70%超
環境	問題行動ありの基準を満たさないが、こだわり、過剰的傾向や不安・緊張の高さ有。
	抽象概念の理解、言語的やりとりが苦手。
	真面目。柔軟な対応苦手、ルーティン化に適応的
	保護者は真面目で努力家。学校に協力的。子どもの特性を理解して対応。不安高い事例あり。
	教育環境は様々。

（1）発達的推移	・55%が同じタイプのまま ・55%で日常生活スキルの低下。高等部までに積み上げてきた日常生活スキルの伸びの頭打ち、それに伴い卒業後の自立を視野に入れ、別のスキルに支援の重点を移した、あるいは卒業を前に判断基準が厳しくなった影響の可能性あり。
支援指針仮説	ルーティン化した流れ、活動を利用。 生活に即した課題の設定。 理解力に合わせた指示、視覚的援助の併用。 緊張や不安、感覚過敏傾向見せる事例に留意。 力に見合った課題設定や環境調整。 保護者の真面目さ、根気良さを生かして連携。 保護者の不安の高さへの配慮。

・全体的傾向 支援事例の傾向

##### (2) ASA 支援パッケージ

ICF や先行研究、臨床経験を参考に、アセスメントの一般的留意事項として、社会適応スキル支援に当たって、押さえておくべきアセスメント領域を表3のように示した。

表3 支援前のアセスメント項目一覧

1) 知能の特性	知能レベル 社会適応スキル 知能<社会適応スキル 知能>社会適応スキル 知能・認知の偏りが大きい
2) 障害の特性	集中が続かない、動きが多い、衝動的である（ADHD） 対人意識が弱い、コミュニケーションがうまくとれない、こだわりがある（自閉症） 知能の遅れはないが、大きな困難を示す学習領域がある（LD） 身体や手指をうまく動かせない（運動障害、不器用） 視力が弱い、見えにくい範囲や色がある（視覚障害） 聞こえにくい、補聴器を使っている（聴覚障害） 話し言葉がない・少ない、話し言葉が不明瞭、話し言葉以外のコミュニケーション手段を利用している 精神疾患があるか、それに類した状態である その他
3) その他の個人の特性	年齢 性別 経験 性格 興味関心、好み 体力や健康状態 願いや夢
4) 環境の特性	【養育者】 経済状況 時間的余裕 身体・精神の疾患や知的発達の遅れ 社会性やコミュニケーション能力 子どもの特性や障害の受容、障害観 【家族関係】 構成 家族の関係 家族の身体・精神の疾患 使用言語・文化 【所属集団】 所属教育機関の特性 担任の理解や対応 担任以外の教職員の理解や対応 子ども同士の関係 所属学級の状況 【地域社会】 地理的環境（地形、気候など） 移動手段 家庭の住環境 地域の住環境 近隣の人による受け入れ状況 【資源】 学校で利用できる資源 学校外のサポート

支援方法をまとめた ASA 支援ステップでは、ASA 検査の各項目に示されているスキルの課題分析を行い、そのスキルを獲得するまでの段階をスモールステップ化して示し、各段階における支援の方法や教材、留意点などを整理した（表4）。

表4 ASA支援ステップで示されている事項

指導開始の目安	この項目のスキルの指導を始めるための条件。
指導の進め方	段階：このスキル獲得しやすくするため、3～5つの段階のスマールステップに分けたもの。 方法：その段階を子どもに指導・支援する際の大人の働きかけ方や場面設定の工夫など。
配慮点	全段階を通じて、配慮すべき子どもの特性や留意すべき支援者の働きかけ等。
教材	ごく自然な声掛けや促しだけではうまくいかない場合に活用できる教材。

これらの作成には、ソーシャルスキルトレーニングや応用行動分析の理論や考え方を取り入れ、社会適応スキルの支援に関する先行研究や指導教材を参考にした。

また、ASAの全192項目のうち、51項目は、子どもの育ちを確認し、発達の目安とするためのものとした。これらの51項目は、支援に際しての指針や配慮点を示していることもあるが、指導の段階や教材は示していない。

### (3)適用研究からの示唆

#### 適用研究の結果

表5は日常良好タイプの2事例への適用の概要と結果(子どもの変容、支援者の変容)および考察(スキルの伸びと停滞の要因、支援パッケージの適用の効果と課題)をまとめたものである。事例によって効果の大きさに違いはあるが、PDCAや課題分析の考えを取り入れたASA支援パッケージは、全ての特別な教育的ニーズのある事例に有効であることが確認された。

表5 日常良好タイプへのASA支援パッケージ適用の結果

	事例1(中1)	事例5(小5)
在籍	特別支援学校	通常学級
障害	自閉症スペクトラム、中度知的障害	緘黙傾向、軽度知的障害
支援開始時の指針	確実に達成できる目標・方法の設定、安心感を持てる工夫、言語理解の弱さへの配慮。	発達レベルに合う目標設定。生活に即した課題。パターン化と反復。スマールステップで成功体験。
ターゲットスキル	言語スキル(指示理解)日常生活スキル(歯磨き)社会生活スキル(電話)対人関係スキル(感情の理解、距離感)	日常生活スキル(靴洗、服たたみ、調理)社会生活スキル(買物)
子どもの変容	担任: ASA言語スキルの伸び、質的向上。保護者: ASA全般の伸び。両者: SMターゲットスキル関連領域で伸び。FU時ターゲットスキル維持・一般化。	保護者: ASA全般の伸び。調理技術向上。ターゲットスキルはFU時にも維持・向上。
支援者の変容	担任: 事例に合った場面設定や指導課題、般化の工夫への気づき。	保護者: 育児への自信向上。着実な成長に導く自信。事例の客観的把握が進み、不安も増大。
伸びの要因	ステップ化とパターン化が事例にマッチ。スキルを獲得しやすい場면을精選して実施。パッケージ導入以前からの支援との連続性。保護者の希望に即した目標で家庭の協力。	事例のニーズ、興味に即した目標や方法、確実に達成できる方法。目標の具体化・ステップ化のうまさ。取り組み・記録の継続性。親子ともまじめ。家族から感謝されるスキルの選択。
停滞の要因	障害特性(自閉症による対人理解の弱さ)と関連するスキル(感情理解)の選択。	保護者のニーズの優先。体調不良。進路選択による心理的余裕のなさ。障害特性(知的障害による

		数や言語の理解の弱さ)と関連するスキル選択。
パッケージ適用の効果	コンサルを通じて教員間の共通理解・認識向上。他生徒の支援にも利用。	対応の仕方の振り返り、小さな伸びや保護者と違うニーズを持つことへの気づき、事例との良い関係が強化。
パッケージ適用の課題	ASAに反映されない伸びの評価方法の整理。コンサルの進め方の工夫。	数や言語の弱さなど障害特性を考慮した系統的支援要。実態把握の深化で事例の困難に正対する保護者への心理的サポート。

### 類型への示唆

#### 1)類型別指針の妥当性

臨床事例へのASA支援パッケージへの適用経過を詳細に分析したところ、類型別支援指針仮説はおおむね支持されたが、事例への適用を通じて新たに配慮すべき事柄も確認された。たとえば、タイプを問わず、事例本人や支援者の余裕(体調、心理面)に留意することの重要性が示唆された。心理的・物理的余裕は、支援の継続の可否を左右するものであるが、とりわけ、支援の主体が保護者の場合は、影響を及ぼしやすと考えられる。学校と家庭が持つ機能に重なりはあるが、異なる部分も多い。それぞれの場の機能や役割、特性に適した形で、長く続けられるような支援の取り組みが大事である。取り組みの中断や目標の下方修正や変更など、柔軟な対応が欠かせない。

また、社会良好タイプは、定型発達児者と同程度あるいはそれ以上にできることがあったり、本人ができないことを隠したり、周りが手出しをするのでできない場面が目につきに多かったりと、実態把握が難しい。これは社会良好タイプに限定したことなく、他のタイプであっても、言語的に流暢で、理解していることが多い(あるいは多く見える)事例、周囲からの手助けが多く、本人が自分でやる機会が多い事例は、同様の問題が生じるだろう。こうした事例に対して本支援パッケージを適用すると、実態の評価が適切に行われやすくなると思われる。

#### 2)類型の変動性

今回の研究では、社会適応の類型が2年弱の間変化しない事例がいた一方で、別のタイプに変わる事例もいた。臨床事例への適用からは、類型が変わった事例であっても、評価時の社会適応の類型や支援指針は、その事例はなぜそのスキルが高いのか(低いのか)どのような個人の特性や環境の特性が影響しているのかを理解することに役立ち、現実的な支援方法の考案の参考になったことが窺えた。障害や能力は絶対不変の固定的なものではなく、その状態には変容が認められるが、多くの場合先天的なものであり、強弱はあるとしても、ある程度安定してその人の中に存在し続ける特性性ものである。一方、社会適応スキルは後天的に学習されるものであり、ASA検査で測定した社会適応スキルの結果も固定化したものではなく、経験や学習を通じて、変容していくと予想される。しかし、

とくに障害の特性の影響を強く受ける種類のスキル(言語スキルや対人関係スキル)は、障害の特性が顕著な場合には変容しにくいと考えられる。これらの双方のことを理解し、支援に当たることが重要であろう。

### 3)未検討事項の分析の必要性

しかしながら、今回は5つのタイプのうち、日常良好タイプ、社会良好タイプ、バランス良好タイプの3つについてしか検討できていないため、言語良好タイプや対人良好タイプについても検討が必要である。

また、今回の研究は、フォローアップまで含めても2年~2年半という、比較的短期間の追跡調査であったため、提示した支援指針が、どの程度の期間利用できるものであるのかは、確認されておらず、今後検討が必要である。さらに、今回の分析対象は小学校高学年以上の年齢段階であり、特別支援学校に在籍する知的障害児に偏っていたため、一般化することは難しい。この点についてもさらなる検討が不可欠である。

### ASA 支援パッケージへの示唆

#### 1)ASA 支援パッケージによる教員への効果

表 6 ASA 支援パッケージを活用した担任(10名)へのアンケート結果

Q1 支援ステップを使ってみて	平均点
1 目標を立てる際に参考になった	4.0
2 方法を考える際に参考になった	4.1
3 生徒の実態把握に役立った	3.5
4 指導の見通しを持ちやすかった	3.6
5 保護者への報告や保護者面談がしやすくなった	2.9
6 必要な内容が収められていた	3.6
7 今後も使ってみたい	4.1
8 もっと見やすく/使いやすくなるとよい	3.6
Q2 コンサルタントとの打ち合わせについて	平均点
9 頻度や1回の時間は適切だった	3.8
10 生徒理解を深める上で役立った	4.5
11 指導の目標や方法を考える上で役立った	4.5
12 担任だけでもできそうだと感じた	1.8
Q3 本研究への協力について	平均点
13 負担を感じた	3.3
14 指導の質や力量の向上に役立った	3.9
15 こうした研究に今後も関わりたい	3.4

(5段階評定 1全くあてはまらない~5非常にあてはまる)

ASA 支援パッケージを使用した教員へのアンケート調査(表6)からは、多くの適用事例において、ASA 支援ステップが目標や方法を個々の能力や障害、取り巻く環境に合わせてアレンジする際の参考とされていた。また、アンケートの自由記述や事例への適用過程における教員へのコンサルテーション面接でのエピソードからは、能力等に適した目標や方法が設定されることで、小さいながらも確実な伸びが認められることは、支援者の支援意欲を維持し、自信の向上にも繋がること示唆された。また、PDCA サイクルで支援を進めるということは、対象事例の状態と支援者の支援の適切さを評価する機会が定期的にあることを意味し、各適用事例において、支援者の実態把握が客観的で適切なもの変容していくことが確認された。ただし、保護者にとっては子どもの成長ばかりでなく、障害特性やその影響を強く受けてスキルの獲得が進まないという実態にも向き合うこ

とになるため、心理的なサポートを行うことが重要である。

一方、見やすいレイアウト等への要望も寄せられており、重複教材の整理やより詳しいステップ化など、手直しを行ったが、さらなる改良が必要であろうであろう。

### 2)コンサルテーション要因の考慮

今回の ASA 支援パッケージの適用は、臨床心理士によるコンサルテーション下で行われた。本研究では、各コンサルタントにコンサルテーションの進め方を一任しており、当然ながらコンサルタントの個性やコンサルテーションの進め方が、適応事例への直接的な支援者に及ぼす影響や、その結果として子どもに及ぼす影響は否定できない。しかし、教員へのアンケート調査からは、直接的に事例の支援にあたる教員は、一人で ASA 支援パッケージを活用することに不安を感じることも、また、コンサルテーションの意義は大きいことが確認された。支援者の力量によっては、一人で本支援パッケージを活用できるだろうが、専門家との協働を見据えた活用の在り方を検討することは重要であろう。

### 3)社会適応スキルの伸びのモニタリングの工夫

ASA 支援パッケージの活用によって、各事例の社会適応スキルには伸びが認められたが、その伸び幅には個人差があった。事例によっては、ASA の得点や相当年齢、スキル段階が上がるような伸びが見られたり、共通性はあるが異なる角度や方法で社会適応スキルを測っている SM の得点が伸びたり、支援に当たっていない保護者の ASA や SM が上昇したりした。しかし、ASA 等の検査の得点には反映されなくても、より難易度の高いステップへと進むなど、質的に向上した事例は多くいた。特別な教育的ニーズのある子どもの状態像は多様であり、支援効果を一律の方法で測ることは現実的ではないが、どのように評価すればよいかについては、今後整理が必要であろう。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計10件)

名越斉子(2014)「さいだいクラス」における保護者クラスの取り組み 埼玉大学特別支援教育臨床研究センター年報 5 24-33

名越斉子(2013)特別な教育的ニーズのある子どもを適切に見取る 信濃教育 1525号 10-18

名越斉子(2013)実行可能性と汎用性を備えた発達障害児の保護者支援プログラムの検討 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 12 72-82

名越斉子(2013)2012年度「さいだいクラス」の取り組み-概要とスタッフカンファレンスの持ち方- 埼玉大学特別支援教育臨床研究センター年報 4 30-39

名越斉子・他 8 名 (2012) 特別な教育的ニーズのある子どものための社会適応スキル支援パッケージの開発と適用の試み 埼玉大学紀要 (教育学部) 60(1) 65-80  
名越斉子 (2012) 「さいだいクラス」における保護者クラスの取り組み 埼玉大学教育学部附属特別支援学校特別支援教育臨床研究センター年報 3 53-62  
名越斉子 (2011) 社会適応スキルの評定に関する研究 - 保護者と担任の比較 埼玉大学教育学部埼玉大学教育学部紀要 60 35-46  
名越斉子 (2011) 「さいだいクラス」における取り組み—指導効果を促進する要因と今後の課題— 埼玉大学教育学部附属特別支援学校特別支援教育臨床研究センター年報 2 39-49  
宇佐美慧・名越斉子・他 6 名 (2011) 社会適応スキル検査の作成の試み - 検査の信頼性・妥当性・臨床の有用性の検討 - 教育心理学研究 59(3) 278-294 [査読あり]  
名越斉子 (2010) 発達障害のある小学生への家庭における社会適応スキル支援の在り方 総合研究機構プロジェクト研究報告書平成 22 年  
〔学会発表〕(計 8 件)  
名越斉子・菊池けい子 (2013) 社会適応スキル支援パッケージの妥当性の検討 (1) パッケージを適用した特別支援学校教員を対象としたアンケート調査からの考察 日本特殊教育学会第 51 回大会発表論文集ポスター発表 P2-I-1 (東京、明星大学 2013.8.30)  
菊池けい子・名越斉子 (2013) 社会適応スキル支援パッケージの妥当性の検討 (2) 自閉症と知的障害のある中学部生徒への適用についての考察 日本特殊教育学会第 51 回大会発表論文集ポスター発表 P2-I-2 (東京、明星大学 2013.8.30)  
名越斉子 (2012) グループコンサルテーションによる社会適応スキル支援の試み - アスペルガー障害児例に焦点を当てた分析を通じての成果と課題の整理 - 日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集ポスター発表 P1-J-10 (茨城、つくばカピオ 2012.9.28)  
名越斉子・宇佐美慧 (2011) 旭出式社会適応スキル検査の信頼性の検討知的障害児の保護者と担任による評定の一致および相関の分析を通して - 日本特殊教育学会第 49 回大会発表論文集ポスター発表 P5-53 (青森、弘前大学 2011.9.9.25)  
名越斉子・他 2 名 (2011) 特別な教育的ニーズのある子どもの社会適応スキルと知能の関連 - 旭出式社会適応スキル検査を用いた量的・質的な検討 日本 LD 学会第 20 回大会発表論文集 274-275 (宮城)  
名越斉子・他 1 名 (2010) ADHD 児と高機能自閉症児の社会適応スキル 日本特殊教育学会第 48 回大会発表論文 396(長

崎、長崎大学 2010.9.18)  
名越斉子・他 7 名 (2010) 旭出式社会適応スキル検査の作成と適用 (1) 検査の概要と統計特性 日本 LD 学会第 19 回大会発表論文集 368-369 (愛知、愛知県立大学 2010.10.9)  
菊池けい子・名越斉子・他 6 名 (2010) 旭出式社会適応スキル検査の作成と適用 (2) 対人関係の困難さがある小 2 児童への適用 日本 LD 学会第 19 回大会発表論文集 370-371 (愛知、愛知県立大学 2010.10.9)  
〔図書〕(計 3 件)  
名越斉子 (2014) ASA 旭出式社会適応スキル検査 (監修) 辻井正次 発達障害自社支援とアセスメントのガイドライン金子書房 全 3 ページ  
名越斉子 (2014) 平成 22~25 年度科学研究費補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書特別な教育的ニーズのある子どもの社会適応の類型モデルと支援パッケージの開発 (課題番号 22531061) 全 152 ページ (監修) 肥田野直 (分担執筆者) 宇佐美慧・菊池けい子・名越斉子 (作成代表)・他 2 名 (2012) ASA 旭出式社会適応スキル検査手引き 日本文化科学社 全 68 ページ  
〔産業財産権〕  
○出願状況 (計 0 件)  
○取得状況 (計 0 件)  
〔その他〕(計 0 件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

名越斉子 (NAGOSHI Naoko)  
埼玉大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 30436331

### (2) 研究協力者 (50 音順)

〔ワーキンググループ〕  
服部由起子 (HATTORI Yukiko)  
旭出学園教育研究所・研究員  
菊池けい子 (KIKUCHI Keiko)  
旭出学園教育研究所・研究員  
小山祐子 (KOYAMA Yuko)  
元旭出学園教育研究所・研究員  
松田祥子 (MATSUDA Shoko)  
旭出学園教育研究所・主任研究員  
斉藤佐和子 (SAITO Sawako)  
元旭出学園教育研究所・研究員  
宇佐美慧 (USAMI Satoshi)  
日本学術振興会特別研究員 (PD)・南カリフォルニア大学  
若林くもみ (WAKABAYASHI Kumoi)  
旭出学園教育研究所・研究員